

有馬頼義
推理小説全集

1

四万人の目

有馬頼義推理小説全集 1

四万人の目撃者 ほか二篇

東邦出版社

有馬頼義推理小説全集 1

昭和46年1月15日

第一刷発行

定価 八九〇円

著者 有馬 頼 義

発行者 藤 山 真 人

発行所 株式会社 東 邦 出 版 社

東京都千代田区神田神保町二〇二八
電話 東京(二六二)五七二五、七
振替 東京 八五二七五

印刷・日大印刷 製本・大和工業

有馬賴義推理小說全集1 目次

四万人の目撃者

奇妙な葬列 12

コリン・エステラーゼの謎 23

虚無と栄光の椅子 35

検事のメモ 46

白い死魚 57

人物 X 71

Xからの挑戦 80

リスとアメリカ人

壁の上 161

手掛りなし 176

寒天と肉汁 192

左記子の黒い目 208

痴情の傷痕 91

検事の推理 102

殺人想像図 113

撃つな 125

石切場の緑の水 136

矢後を見てくれ 147

氷雨の中 219

リスは登場したか 229

嘘 240

掘り起された惨劇 251

殺すな

恋人たち 262

靴 272

孤独な追跡 281

重要参考人 295

八枚のカルテ 306

海の色 315

露頭 333

深夜の訪問者 417

バラ園の少女 344

検事の立場 427

穴 354

共通の孤独 438

石油の登場 365

海の密室 448

鬼火 375

火の雨 459

積乱雲 385

対決 469

壁 396

夜の道路にて 480

不幸な着想 406

黒い絵 490

摄影
佐藤孟志

四万人の目撃者

その、いまわしい日曜日の朝のことを、新海^{しんかい}菊江は後になつて、いやになるほど、根ほり葉ほり聞かれた。警察の人からも、新聞の人からも、妹の長岡阿い子からもきかれた。しかし、何かが、それによつて解けてくる、というような出来事は、全く何一つある筈がなかった。平凡な朝が来て、いつもと少しもかわらない一日がはじまつただけであつた。

ただ一つ、こういうことは言えたかも知れない。それは、何の理由もなく、良人の新海清の持つてゐる雰囲気^{ふんいき}のようなものが、何となく、暗く、——ちようど、夕暮が、何処^{どこ}からともなく近付いて来て、都会をその薄墨の中に溶かし込んで行くように、空しさを感じさせるようになっていた、ということであつた。しかしそのことは勿論、その日曜日の朝に限つてやつて来たわけではない。人一倍神経質な新海清にはわかつていたことなのだし、あらたまつて話題にのせないでも、妻である菊江にも感じられた。それは多分、新海清のからだの中の何処からか、ひそかに湧き出て来る老いのようなものであつた。新海清のからだから湧いて来たそれは、新海清の生活全体に、何か影のようなものを落しはじめ、菊江もその中に包まれてしまつた。それが老いだとすれば、結局、いつ

かは対決しなければならぬものであつた。そのことが、特にそのいまわしい日曜日の朝、二人の間で話題になつたわけでもなく、その対決の時がその日だという切羽つまつた気持は、少しもなかった。

新海清は、菊江が起き出して台所へ立つたあとで、間もなく起きて庭へ出た。毎朝のことであつた。清は秋の近い朝日を背中にあびて、バットを振つた。そのバットは、彼がゲームに使うには、少しばかり重くなりすぎたのだが、アメリカの有名な野球選手にもらつたというバットの履歴を、彼はかなり大切にしているようであつた。

朝食も、いつもとかわりはない。熱い味噌汁の中に、卵を落してあつた。蓬萊^{ほうらい}屋の黒豆と、海月のうにあえ。いつものように、清は、無口にそれを食べた。

「晩には、肉を買つておいでくれ」と彼は、食事がすんで、ビタミン剤の錠剤を口の中へほうり込んでから言つた。

それから、どんな話をしたか、菊江は、殆んど覚えていない。覚えていないほど、どうかしていたのではなく、何も記憶に残るような話をしなかつたのだ。

九時頃、新海清が新聞のスポーツ欄をひろげている時に、近所の子供が一人、庭先からはいって来て、友達に頼まれたというサイン帳を出した。菊江がそれを良人の処へ運び、また子供の処へ戻した。スポーツ欄を見ている新海清の顔に、特別なものは浮んでいなかった。四打席無安打という土曜日

のゲームも、特別に彼を口惜しがらせてはいないようであった。

十時頃、妹の長岡阿い子から電話がかかった。大した用ではない。野球場へ行くかとときくから、自分には行かないと答えた。まだ電話口にいる時に、清が何か言ったので

「ちょっと待って」と妹に言っけふりむくと、清は顔をあげずにこう言った。

「第二試合は矢後だと言っけおけ」

その通りを、妹に伝えた。

十一時に、新海清は、家を出たが、出る時、いつものように、ビタミン剤をもう三錠、口の中へほうり込んだ。夏の間は、ダッグ・アウトでレモンを吸っていたが、自分の体には、ビタミン剤の方がいい、と言っていた。

門を出てから、近所の子供の声が聞えたから、またサインをさせられているのかも知れないと思った。しかしそれを見ただけではなかった。

良人が出かけてしまうと、自分だけ、簡単な昼の食事をした。それから洗濯や片付けものにとりかかった。

仕事のすんだのは、三時頃であった。誰も来ない。家の中にいても、秋の来たのが感じられるような空気の澄み方であった。洗濯ものを裏へ干して、風呂の掃除をして、新しい水を汲み終った時、車が表にとまった。入沢マネジャーが、こるがるようにして玄関へ飛び込んで来て

「すぐ球場へ行って下さい。そのままでもいいから、早く！」と言った。

「どうしたんですか。何かあったの？」と言いなながら玄関へ出て行って、入沢の顔を見たとき、菊江が感じたものがあつた。それは、理由もなく、自分達の生活を見舞った絶望のようなものであつた。菊江は、新海清の死に目に会っていない。

——十一時に経堂の家を出た新海清は、いつもの道順で、都心のK球場へ来た。途中で、何もかわつたことはなかった。彼が考えていたのは、今日は少なくとも二本は打たなければならぬ、ということであつた。木曜日のゲームに一本打ち、中一日おいて昨日は一本も打っていない。打率は二割六分五厘に落ちていた。九月にはいって二割六分五厘というのは、もはや絶望的であつた。今年二割台とすると、二年続けて三割を割つたことになる。打率として、何も恥じる程のものではないが、十年の間、一年をのぞいて三割を打ちつづけた新海清にとっては、残念であつた。世間は、ホームランを打たなくなったとき、彼の失調を責めた。しかし、その年は三割二分をマークした。その翌年二割九分で終つたとき、新聞は彼の体力の限界を云々した。その翌年から二年続けて三割を打つたとき、世間は、彼の精進と復調をたたえた。ホームランを打たないことを責めなかつた。新海清は、リーグで唯一人の、信頼すべき四番打者であつた。しかし、彼の努力にもかかわらず、去年と今年の不調は激しいがたかつた。それは、

打撃以外の面にも、徐々にあらわれて来た。走るのが遅くなった。みすみす二塁を奪えるような当りをして、一塁にとどまることが多くなった。キャンプのトレーニングや、毎朝のランニングも、もはや新海清の体を昔のようにする効果はなかった。彼は、逆に、自分をいたわるようになった。

「打順を下げて下さい」と彼は監督の加治屋淳一に頼んだことがあった。しかし、たとえ二割九分でも、その打率は、チームでは最も高い打率であった。彼は今年も、四番を打ちつづけた。しかし、勝敗に関係のない最終打席などに、矢後七郎が代打に出て、そのまま一塁の守備にはいるようになったとき、新聞記者は、矢後七郎の手腕を、高く評価するようになった。

「矢後をもっと使って鍛えるべきだ」という人が多くなった。「矢後のような逸材を、新海のかげにくすぶらせておくのは惜しい。矢後は、よそのチームへ行けばそのまま一塁でやって行ける選手だ」という声が出た。

新海清は、そういう声を、黙ってきいた。全盛期には、三割を割ったら、思いきりよくやめよう、と考えていたのだ。

しかし彼が三割を割ったとき、ほかに三割打者は、一人もいなかった。新海の不調でゲームを落した、という風な観察をする人さえいたが、それは、全盛期の新海清を考えている人だ、という反論が出た。その証拠に、今年も新海清は、無条件でオールスター戦に選ばれた。新海清は、ひっこみのつか

ない立場に、自分が立たされているのを感じはじめた。今年が最後かも知れないということは、去年のペナント・レースの終り頃、二位が確定したときにも思ったし、今年もまた、それを感じていた。

セネタースの属するBリーグでは、上位三チームが混戦していて、一ゲームごとに首位が入れかわる有様であった。勢いゲーム毎に投手の出来や、その起用法や、打点の多少が問題になった。無数の、冷酷な眼が、新海清の遅い足にも向けられた。それはかなり辛いことであった。しかし実際、新海清自身には、どうすることも出来なかったのだ。

その日のダブル・ヘッダーに二勝すれば、セネタースはトップに出ることが出来、二敗すれば三位であった。加治屋監督は、全く何の躊躇もなく、第一試合の四番に、新海清を据えた。しかし、そのゲームにも、彼は一本も打てなかった。その上悪いことに、最終回に四球に出た新海は一死後シングルで三塁まで行き、次の打者の右飛でホームをついて刺された。かなり浅いフライではあったが、三塁走者が外野飛球で生還するということは、一塁にもう一人の走者があった点から見ても、日本のプロ野球では当たり前なことであった。相手の右翼手が、新海清の足を計算してホームへ好球を送ったかどうか、知るよしもないが、彼がホームで刺されたために、そのゲームを失ったという印象が強かった。

「何で矢後をピンチ・ランナーに出さなかったのか。若い矢

後の脚なら、楽にホームインした筈だ」

四万の観衆の無言の叱責が、痛いように新海清には響いた。そして当然、第二試合の一塁は、矢後七郎が守るべきであった。

だから、第二試合の先発メンバーの四番に、再び新海清の名がアナウンスされたときの観衆のどよめきは、新海清が受けるべき非難ではなくて、監督の加治屋淳一が受けるべきものであったと言うべきであった。

新海清は、今朝、阿い子から電話がかかったことを思い出した。阿い子は、スタンドの何処かにいる筈であった。矢後を最初から出してやりたい、と彼は思った。

「二、三日前から、腹の具合が少し悪いんです」と彼は加治屋に言った。

「嘘をつけ」と加治屋は笑った。

「嘘じゃない。ほんとですよ」

「俺はね」と監督は言った。「数字というものを信用している。例えば、三割打っている人間には、三度に一度か、四度に一度はヒットが出るものだ」

「僕は今日四回、昨日四回、打っていない。八回に一本も出ていないんです」

「このゲームで四回打つとするだろう。そうすると、三ゲームあわせて十二打席ということだ。三割とすると、その十二打席の中で、四本位出るわけだ」

「だから、僕は三割打てないということですよ」

「いや違う。このゲームで、四打席四安打という計算が出て来るんだ。俺の計算ではね」

加治屋は、それ以上とりあわなかった。そして不思議なことに、新海清は第一打席で三遊間を抜き、第二打席で、右中間を高々と抜いた。

歓声の中を、新海清は、走っていた。二塁を廻るとき、三塁コーチに出ていた加治屋の右手が大きな円を画いて廻っているのを見た。ショートと守備位置には誰もいない。相手の投手が、三塁のバックアップに走って行くのが見えた。それだけのものを見たとき、突然、走っているのが自分ではないような気がした。新海清は、三塁キャンパスのかなり手前で、前のめりにグラウンドの砂の中へ、顔から落ちた。彼が、単にすべてで転んだのではないことは、ライトからショートを中心して返されたボールを、三塁手が彼のからだにタッチした時にわかった。新海清は、全く動かない一つの物体になっていた。

担架で、球場の診療室に運び込まれたとき、新海清は既に死体であった。球場の医者は、かんとんに新海清のからだを見て

「心臓死ですね」と言った。

医者が、心臓死という言葉を使ったのは、珍らしい。死因、という意味で言ったのだ。しかしそれ以上のことは、新海清

のからだをふだん見ている医者にきかなければ、はっきり言えなかった。入沢マネジャーが、菊江と主治医を迎えに飛んだのは、その直後であった。あわてて、病院へつれて行け、と言ったのは、茂木オーナーであったが、死んでしまった者を、何処へ入院させればいいのか、誰も、返事をしなかった。ゲームは再開されていて、其処にいるのは、オーナーと医者、中崎コーチの三人だけであった。新聞記者がすぐに数人飛んで来たが、整備員に追い返された。

「まだ此処にいるのか」

「病院は何処だ？」

「容態は？」と彼等は口々にきいたが、整備員には、答える資料が何もなかった。そして再開されたゲームが終る前に、入沢マネジャーが、妻の菊江と、寺原という近所の医師を連れて戻った。寺原医師の考えも、前の医者と同じであった。

「肥大が少しあったのです。二、三日前に、腹の具合が悪いから薬をくれ、と言って見えたとき、自分でも大そう疲れ易く、走ると呼吸ぎれがする、と言っていました」

医者が二人いて、そういう意見に落着いたのは、この場合無理のないことであった。そして寺原医師がその意見をのべ終ったとき、茂木オーナーは、次のことを心配した。病院へつれて行けと言った埋め合わせのように、茂木は、てきぱきと、入沢に次の処置を命じた。それはゲームが終って人がなだれ出て来ないうちに、新海清の遺骸を運び出すことであつ

た。手配がついて寝台自動車と呼ばれ、どうやら人目をひかずに遺骸を移したあとで、茂木オーナーは、寺原医師にこう言った。

「会社の幹部と相談しなければならぬことですが、どうもこれは、自宅か病院へ行ってから死亡したことにした方が、外部に対して具合がいいようですが……」

「私もそう思っていました」と寺原医師は頷いた。誰にも、計画や、悪意があったわけではない。それは要するに、新海清の人氣に由来する社会的影響への考慮であった。入沢が、もう一度一緒に新海家へつて行き、茂木オーナーが残つて、ゲーム終了を待ち、加治屋監督と事後の相談をすることになった。

良人の遺骸につきそつて自動車に乗るとき、菊江が茂木に「妹が来ませんでしたでしようか」ときいた。菊江は、此処へ来る時、当然、阿い子が傍にいるものと思つていた。

「来ませんでしたよ。スタンドにいたんですか？」

「今朝電話で、そう言っていたものですか……」

「何かの都合で、来られなかったんでしよう。電話をかけさせましょう」と茂木は言い、遺骸に一礼した。

走り出した寝台車の中で、菊江は、入沢と向かい合つていた。寺原医師は、助手台に乗っていた。

「その時の様子を、ごらんになりましたかしら？」

「ええ」

「どんな様子でしたの？」

「物凄く当たってしましてね」と入沢は目をつぶった。「三本のヒットを右中間に打って、三塁へ走り込もうとしていた時です。誰も、そんなことを予想なんかしていません。ベンチが総立ちになって、飛び出して行きましたよ。最初は、転んだだけだと思ったし、すぐに起き上らないんで、何処かを痛めたんだと、——みんなにかかえられて来たとき、まだ呼吸があったんじゃないかな、地下道を通っている時、いけなくなりました。しかし、信じられない。最後のヒットは、目のさめるような当りだった」

「……」

菊江は、自分が泣いていないことに気付いた。悲しみというものは、驚愕きょうがくと同居し得ない性質のようであった。今にも自分が泣き出すかと思ひ、袂たもとの中でハンケチを握りしめていたが、何かもっと、重大なことを考えなければならぬような気がした。絶望のただ中へはいると、絶望は見る事が出来なかった。

奇妙な葬列

月曜日の朝、東京地検の高山正士検事は、居間の八畳じようの隅に置かれたベッドの上で目をさますと、妻を呼んで、朝刊を全部持って来させた。

「ベッドでござんになるんですか」と妻は目をまるくした。かねがね検事の妻は、良人おとこが新聞を横目で睨にらみながら朝食をすることを嫌っていた。しかし何度文句を言っても、高山検事の習慣はあらたまりはしなかった。それがベッドへ新聞を持って来いというのは、更に我慢がならないことであった。

「起きてからござらんになったら……」

「いいから持って来なさい」と検事は少し強く言った。

「まあ、こわい。わたくしは犯罪者ではございませんよ」

検事の妻は、言うだけ言うと、言われた通りにした。それから「お食事は？」ときいた。しかしその時検事は、新聞のスポーツ欄をひらいて、喰いつくような顔で読んでいた。何かの事件かと思つたが、そうではない。高山検事が読んでゐるのは、確かにスポーツ欄であった。検事の妻は黙って部屋

を出て行った。

新海清のことが大きく出ていた。球界はじまって以来の不慮の出来事、という見出しがついていた。高山検事は、別の新聞をひらいた。それには、新海清試合中に倒る、とあった。また別には、不世出の大打者劇的な最後、と書いてあった。内容は大きくは違わない。昨日、高山検事自身が見たとおりのものであった。しかし、新海清が、結局夜の十時頃、死亡した、ということは確かであった。死んだ、ということとは、彼が試合中に倒れたという事件よりも、かなり後になって新聞社にはいったらしく、記事が二段に分れていた。劇的な最後という見出しをつけた新聞は、続報がはいってから組みかえたもののようにあった。グラウンドに倒れている新海清の写真のをのせている新聞もあり、のせていない新聞もあったが、死者としての彼の写真や、自宅の写真のをせた新聞はなかった。十時頃、という時間は書いてあったが、それがニュースとして新聞社にはいったのは、更にずっと遅くなってからであったようだ。死因について、心臓麻痺というのもあり、心臓衰弱というのもあり、狭心症というのもあった。しかしいずれにしても、高山検事自身が、ネット裏から見ていたことに、その記事をつまみ、新海清が死んだ、という事実をくつつければ、それでいいわけであった。不幸な死があったのだ。日本の球界が、優秀な一人の選手を失ったことは事実であった。

オーナーの談話や、選手達の、悲しみをこめた追懐は、高山検事にとって、あまり重大ではない。セネタースが、首位争いのこの大切な終盤戦に、若い矢後七郎を一塁に起用し、新しい四番打者に、誰かをくり上げなければならぬ、ということも、大して興味をひかない。

高山検事は、かなりながいこと、それらの新聞記事を眺めていた。それから、ぶるんと頭を一つ振って起きた。

「セネタースの新海が死んだよ」と検事は妻に言った。検事が、食事の途中で妻に話しかけるのは、珍らしいことであった。彼は、スポーツ欄以外の記事はまだ見ていなかったが、どういうわけか、その日は、食事中に新聞をひろげようとしなかった。

「昨日、僕が見ている前で、だ」

「試合中に死んだんですの？」

「死んだのは夜だ。しかし、試合中に倒れたんだ。大きな三塁打を打ってね、もう少しで三塁ベースだというところで倒れた」

「珍らしいうございますね」

「珍らしい。怪我というのは、よくあるがね。死んだのは、二十年も野球を見ていて、はじめてだ。いや、一度あった。久慈という名捕手が死んだ。しかし、僕はその時見ていなかった」

「運動選手というのは、大体丈夫なものになるものでござい

ましよう」

「そりゃあ、そうさ」

「それでも、そんなことがございますのね」

「少しは何処かが悪かったらしいね。何しろ心臓なのだからね。節制もしているだろうが、夏場の過労がこたえているんだ。それに、新海はもう相当な年齢だ」

食事が終わったので、検事は出勤の支度をした。月曜日だから、役所は仕事が終わっているに違いなかった。

その次に、新海清のことが、高山検事の頭に浮んだのは、仕事がすんで、夜遅く大森の自宅へ戻って来てからであった。「野球葬というのは、どういうことをするんでございましょうね」と検事の妻がきいた。

「別に、葬式にかわりはないさ。費用を誰が出すか、という違いだけだ」

「明日でございますってね。大そう子供に人気のあった選手だそうですね。御近所の子供さんも、明日はその人のお葬式へ行くんだと言って居りますわ」

「そうかね」と検事は頷いた。

それから一晩中と翌日の半分、検事の頭から、このことが消えたり、またあらわれたりした。それは、二十年もの間野球を見て来たファンとしての高山正士が考えているようでもあり、検事としての自分が考えてもいるようでもあった。

高山検事は、何故、新海清のことが、いつまでも頭を去ら

ないのか、ということ考えた。何か理由がありそうではないのか、ということ考えた。何か理由がありそうではないのか、ということ考えた。商売柄、目撃した出来事の裏に、犯罪のようなものかひそんでいるのではないかと、自分が疑がっているのかとも考えたが、根拠がない。その晩は、寝苦しかった。うとうとしていたうちに朝が来た。全然眠らなかったような気がしたが、眠ったことは確かであった。しかし、新海清のことは、やはり消えていなかった。それで、とうとう肚をきめて、新海清の遺族を訪ねてみることにした。余計なことかも知れないが、自分のために、納得する必要があるし、デビュー以来の新海清の活躍を眺めて来た一ファンとして、そうぶしつけなことではないと思った。

新海清の家は、人に聞く必要がなかった。子供の歩いて行く方へ歩いて行けば、自然に彼の家の前へ行けた。学校のある時間だから小さい子供が多い。道路いっぱいに群れていた。検事は、受付へ行って名刺を出し、奥さんに会いたいと言った。しかし「ファンとして、ただのお悔みに来ただけです」とつけ加えることを忘れなかった。検事が通されたのは、北側の三畳であった。ふだんは子供部屋に使っているようであった。検事は悔みをのべたあとで

「私は昔から新海さんのファンだったのです。ちょうど日曜日の試合も見て居りましたね」

「はあ」と菊江は頭を下げた。喪服を着ている菊江は、凄惨程美しく見えた。